魔法少女リリカルなのは&ディケイド

旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは＆ディケイド

【Ｎコード】
Ｎ６３２７Ｍ

【作者名】
旅人

【あらすじ】
リリカルなのはの世界へ転生してしまった士。その士がなのは達とともに歩んでいくお話です。

世界の破壊者ディケイド。
その瞳は何を見る…

プロローグ（前書き）

リリカルなのはの世界にディケイドが介入します。

初めての小説なのでおかしなところもあると思いますが、よろしくお願いします。

プロローグ

平凡な小学3年生だったはずの私、高町なのはに起こった突然の事態。

私は昨日の夜から魔法使いになってしまいました。

昨日、塾へ行くときに出会った傷ついたフェレット、ユーノくんが大きなお化けみたいなものと戦っているのを魔法を使って助けるができたのですが……

色々あってまだ何も詳しい話はできていないのですが学校へ遅れちゃうのでとりあえず…

「いってきまーす！」

その時の私はこれから起こる大変な事件のことを何も知りませんでした。

魔法少女リリカルなのは&ディケイド

始まります。

プロローグ（後書き）

感想、指摘などありましたらドンドンお願いします。

参考にさせていただきます。

キャラ設定（前書き）

この小説のディケイドは仮面ライダーでもあり魔法使いでもあります。

士の設定も世界観に合う様に少し変えてありますので別物として読むと読みやすいかと思います。

キャラ設定

主人公設定

名前・門矢士

年齢・８歳

身長・１２３？

体重・２２？

誕生日・１２月１６日

血液型・Ｏ型

好きなもの・甘いもの全般

苦手なもの・ナマコ、ニンジン、お化け、注射

趣味・カメラ

特技・（カメラ以外）全て

性格・自由奔放な自信家

魔力光・マゼンタ

ほとんどが原作同様の設定だが原作終了後の事件によりリリカルな

のはの世界に転生してしまう。その時のショックでまた記憶喪失になっている。

しかしディケイドライバーは持っており現時点ではカードもだいたい揃っている。

記憶喪失でも性格があまり変わらないのはディケイドライバーのせいである。

この世界へ来た影響で魔力が備わり、魔力とカードの力でディケイドへと変身する。デバイス設定

名前・ディケイドライバー

規格・ライダーズデバイス

人格・男性

形状・バックル型

士をディケイドに変身させる為のデバイス。

基本的な性能面は変わらないが、発生するライダースーツがバリアジャケット風になっており仮面もない。

リリカルなのはの世界へ転生した時の影響と世界への適応の為人格がつき普段からしゃべったりするようになってしまう。

前回の旅の記憶も有しており、その時の旅のことを士へ語るのが趣

味。
また、語り出すと止まらなくなるが肝心なことは言い忘れる。
現在の士の性格が変わらないのはコイツが語りすぎるせい。名前・明石竜也
年齢・３３歳
職業・小学校教師
記憶を失って倒れていた士を家に連れ帰り育てている。
何事にも動じない性格でしゃべるバックル（ディケイドライバー）を見ても驚かない大人物。
ただし、彼女という単語が出てくると大抵壊れる。
士は表面上はバカにしているが大変恩義を感じており尊敬している。

キャラ設定（後書き）

設定に書いてある事件に関しては今後書くことになると思います。

プロローグ2・始まりの朝（前書き）

魔法少女リリカルなのは&ディケイド

始まります！

プロローグ2・始まりの朝

『マスター！マスター！！起きてください！朝ですよ！』

…まだ6時じゃないか

「……あと30分…」

『ダメです！もうすぐ竜也さんが起こしにきちゃいますよ！』

…それはウザイな…

「わかっ「グッモーニン！士！！」

バキッ！

と、あいつはドアを開けたのと同時にドロップキックをかましてきやがった。

「いってぇーな！なんで普通に起こそうとか考えねぇんだ！てめぇは！！」

『おはようございます、竜也さん』

「おはようドラちゃん！」

…無視かよ

「朝飯いらねぇんだな…」

「すいませんでした！」

勝った！と、毎朝恒例の絡みが終わり朝飯の時に

「昨日の夜に車の事故があったみたいだから、お前も気をつけろよ」

…ガキじゃあるまいし

「お前は写真を撮っている時に熱中しすぎるから心配なんだよ」

…心の中を読んできやがった！

「返事は…」

「わかったよ」

それから竜也を見送り、

「じゃあ、俺たちも行くか！」

『そうですね。カメラも持ちましたか？』

「当然だ！」

そう言って学校へ向かう俺たちがまさかあんな事件に巻き込まれるとは思ってもいなかった。

プロローグ2・始まりの朝（後書き）

士視点の始まりを書いてみました。

竜也のキャラが思ったよりも立ってしまい少し驚いています。

次回こそは変身させます。

ディケイド参戦（前書き）

うまくまとまりきらない。どうしたものか…。

魔法少女リリカルなのは&ディケイド

始まります

ディケイド参戦

ＳＩＤＥ：士

学校へ着いた俺は授業が始まるまで写真を撮ることにした。

そこへ

「あんたも好きね～、写真」

「俺はいずれ世界の全てを写したいと思っているからな！」

「でも撮った写真は変な写真ばっかだよね～」

「私は士くんの写真、おもしろくて好きだけどな～」

こいつら…好き勝手に。上からアリサ、なのは、すずかの３人娘がそう言ってきた。

そして

（ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産なんだ）

授業中にいきなり響く声に驚いたが、どうやらなのはと会話しているらしい。会話を聞いているとユーノって奴がジュエルシードというものを集めており、なのははそれを手伝っているらしい。まぁ、魔法って単語は気になるがだいたいわかった。

（困っている人がいて助けてあげられる力が自分にあるならその時は迷っちゃいけないって。これ、うちのお父さんの教え）

……詳しく聞いてみるか。答えるかは別だが。

放課後

なんで、今日に限って掃除当番なんだ！なのは達は先に帰っちゃったし。

ドクン！

なんだ！？

『マスター！海鳴神社の方に反応があります』

向かった先で見たのは大きな獣に襲われそうになっているなのはだった。

…なんだ、あれ？
まぁ助けないわけにはいかないか。

「いくぞ！ディケイドライバー」

『オーケー！マスター！』

「変身！」

そうしてディケイドライバーを腰にあてカードを挿入する。

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ！ＤＥＣＡＤＥ！！』

そうして俺はマゼンタ色の戦士に変身し、獣へ向かっていった。ＳＩＤＥ：なのは

私がユーノくんと一緒にジュエルシードが発動した地点に向かい、大きな生き物に襲われそうになっていると目の前をピンク色の人が通りすぎて行きました。

剣みたいなもので何回も攻撃しており、最後に蹴り飛ばしてしまいました。

「大丈夫か？なのは」

「士くん！？」

そういってまた向かっていくピンク色の人は私のクラスメートの門矢士くんでした。

えっ！？えっ！？ふぇっ！？

何がどうなってるの！？

「なのは！なのは！！」

「は、はい！」

「早く封印を！！」

「あっ！そうでした！」

ユーノくんからそう言われレイジングハートをセットアップし、

「士くん！退いて！！」

「リリカル…マジカル…ジュエルシードシリアル？？封印！」

レイジングハートから光が放たれ、とりあえずジュエルシードを封印することができました。

そうしてこっちへ向かってくる士くん。

「とりあえず詳しい話を聞かせてもらおうか？」

どうしよう…。なんて説明しよう…。

ディケイドの力（前書き）

この時点ではまだ2人とも変身解除をしていません。

士・なのは「魔法少女リリカルなのは&ディケイド、始まります。」

ディケイドの力

「とりあえず詳しい話を聞かせてもらおうか？」
「…わかりました。僕がお話します」

なのはの肩に現れたフェレットはしゃべり始めた。

「しゃべった！？」
「私と同じこと言ってる…。」
「おほん…。僕の名前はユーノ、ユーノ・スクライアといいます。」

それからユーノは自分のこと、ジュエルシードのことについて話始めた。

「だいたいわかった。要はジュエルシードってやつを21個集めればいいんだな？」
「確かにそうですけど…」
「俺も協力してやる」
「ホントに！？」

なのはがやたらくいついてきた。なんで…？

「ああいうものと戦うのは割と慣れてる方だ。それに人数が多い方がなにかと便利だしな」

「でも……」

あぁ、まどろこっしいな…。その時、目の前に黒いオーロラが現れた。「ジュエルシードをこちらに渡して貰おうか…」

オーロラの中から喪服姿の女と大量の虫の軍団、ワームが現れた。

「士くん…」

なのはが心配そうにこちらを見ている。

「なんだ、あんたら。」
「私の名前は間宮麗奈。ある組織から来た者だ。」
「ジュエルシードをどうするつもりだ？」
「貴様には関係のないことだ。さぁ、どうする？素直に渡すのか？殺されて奪われるのか？」

うわぁ、ものすごい悪役の台詞だな…。

「そう言われて素直に渡すと思うか？」
「いいだろう…。貴様には最も残酷な死を送ってやろう。」
「どうかな？なのは達は下がってろ。俺がやる！」

そう言って俺はワームの大軍に向かっていった。ワームの数はざっと見て３０体前後。まぁ、まともにやってもなんとかなるけど面倒だなぁ…。
そんなことを考えながらカードを挿入した。

『ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ』

銃の形に変形させたライドブッカーを使い一度に数体のワームを倒していくが一向に減らない。

『マスター。このカードを使いましょう』

よし、そうするか！
と、新たなカードを使用した。

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＲＹＵＫＩ』
「「変わった！？」」

続けて

『ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ』

そして空から龍の顔がついたナックル、ドラグクローが落ちてきて右手に装着する。

「おりゃー！！」

ドラグクローから発した炎はワームを一掃した。

「さぁ、残ってるのはあんただけだ…。」

そこで間宮麗奈は怪人の姿ウカワームに変身した。その直後、ウカワームの姿が見えなくなった。

「「消えた！？」」

「クロックアップか…。」

そして俺はウカワームからの一方的な攻撃を受け続けた。

『マスター！！』

「わかっている！」

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＫＡＢＵＴＯ』

新たな姿ディケイド・カブトに変身し更に

『ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

そして俺は超高速の世界に突入した。

「何なんだ！？貴様は…！！」

「さぁな…。」

超高速の世界で戦い続ける俺とウカワーム。

「あえて言うなら、通りすがりの魔法使いだ。覚えておけ！！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＫＡ・ＫＡ・ＫＡ　ＫＡＢＵＴＯ』

俺はカブトの必殺技ライダーキックを発動させ回し蹴りを当てる。

吹き飛ばされクロックアップが終わるウカワームと元の姿に戻る俺。

「どうする？まだやるか？」

「くっ…。」

その時またオーロラが現れ、中からウルフイマジンが現れた。

「やれやれ、またか…。」『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

俺は自身の必殺技ディメンションキックを発動させウルフィマジンを倒した。

「さて、お次は……。なのは！あいつはどうした！？」

回りにはなのはとユーノしかいなくなっていた。

「さっきの狼をやっつけている間にいなくなっちゃったよ。」
「逃がしたか…」
「士くんすごいね！」

少し時間が経ち、なのはは俺を誉めてくるがユーノは少し引いている。

「君はその力をどこで…？」
「あぁ、気付いたらこうなっていた！」
「えぇっ！？」
「士くんは昔のことを覚えていないの。」
「記憶喪失ってこと？」
「大体そんな感じだ。ところでどうする？俺の力は不要か？」
「……よろしくお願いします。」

「よろしい」

こうして俺はジュエルシード探しに協力することになった。

「ところで、どうして手伝ってくれる気になったの？」

「…秘密だ。」

お前の言葉に共感したから…なんて恥ずかしすぎて口が裂けても言えるわけがなかった。

ディケイドの力（後書き）

〔言い訳コーナー〕

なのは「私の出番が少ない！」

士「しょうがないだろ。この話は作者が『ディケイドってすごいんだぜ！』っていうのをなのはに見せたくてつくった話だからな。」

すいません。自重します。

次回はドラマＣＤでもあったプールの内容にしようと思っていますが、作者はドラマＣＤの内容を殆ど知らないのでオリジナルの話になると思います。

では、なのはさんお願いします。

なのは「リリカル…マジカル、次回もがんばります！！」

プール・トラブル

俺は周りを囲まれていた。周りの奴ら、９人の仮面の戦士は俺を狙っているらしい…。

「あなたの旅を終わらせます」
「この世界から出ていけ！」
「ディケイド、お前を倒す！」

勝手なことばかり言いやがって…。

「結局、こうなる運命か…。変身！！」
『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』
「来るなら来い！すべてを破壊してやる！！」

そう言って俺は９人の仮面の戦士…仮面ライダーたちに向かっていった。「士くん！起きて！！」
「…ん…」

どうやら俺は授業中から眠っていたらしい。体を起こすと目の前にはなのはが怖い顔をして立っていた。さながら魔王のようだ…。

「なんか失礼なことを考えてなかった？」

「別に…。何か用か？」
「あのね…。今度の休みにアリサちゃんたちとプールに行くんだけど、士くんも一緒にどうかな…と思って」
なのはの後ろの方でアリサとすずかがこちらを見ている。
「悪いな。今はそんな気分じゃない。」
「えっ！？具合でも悪いの？」
「まぁ…そんなとこだ」
そう言って俺はその場を離れた。
「何なのよ！！あの態度！！」
「アリサちゃん落ち着いて」
「だって、せっかくなのはが誘ったのに」
「…仕方ないよ。」
俺はなのは達から離れ屋上に来ていた。
『マスター…。また、あの夢ですか？』

自分を破壊者と呼び戦いを挑んでくる者達の夢…。ディケイドライバーが言うには俺の過去らしいが記憶の無い俺にしてみれば嫌なものでしかない。そんな夢を週に2、3度は見る。嫌な気分になって当然だと思うが…。

『なのはさんが折角プールに誘って下さったのですから皆さんと一緒に行ってもよろしかったのではないでしょうか？』

…今頃になって罪悪感が出てきた。なのは達には悪いことをしたかな…。休みの日、今日はなのは達がプールへ遊びに行く日。

『マスター。本当に宜しかったのですか？』

今、俺は写真を撮りに近くの公園に来ていた。

「喋るな。目立つだろ」『しかし…』

わかってるよ。悪かったと思ってるよ。でも今更どうしろっていうんだ。その時…。

『マスター。ジュエルシードの反応が現れました』
「どこだ？」
『それが…。なのはさん達が遊んでいるプールの辺りです』

俺は自分の運のなさに絶句した。そして俺はなんとか結界内に滑り込みなのはとジュエルシードが生み出した水の体でできた獣（以下水獣）の戦いを見ていた。

「なのは…頑張ってるな」
『マスターは何もしないんですか？』
「……なのはに会うのが気まずい」

あんな風に言っといて普通に話なんか出来ねぇよ。

『マスターは人を気にしすぎです。なのはさんはマスターが思うよりずっと心の大きい人だと思いますよ』

コイツ、いっちょ前に説教を…。

『気にしているのでしたら謝ってしまえばなのはさんもきっと許してくれますよ』

…。
そんなやり取りをしている間になのはは水獣に捕まってしまっていた。

「…いくぞ！ディケイドライバー」
『はい！』
「変身！」
『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

変身した俺はなのはを助けに向かった。そして俺はライドブッカーをソードモードになのはが捕まっている部分を切り裂いた。

「なのは…無事か？」
「士くん！」

大丈夫みたいだな…。
しかし、体が水でできている水獣は切り裂かれた部分をものともせずこちらに襲いかかってきた。さぁ、とりあえずこいつをどうするかな…。

「なのは！今から少しだけこいつの動きを止める。その間にジュエルシードを…」
「でも！一人じゃ危ないよ」
「大丈夫だ。まかせろ！」

そうしてなのはの少し前に出る。

「変身！」
『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＢＬＡＤＥ』
「また変わった！？」

なのはが後ろで驚いている。

「いくぞ！」
『ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＴＨＵＮＤＥＲ』

俺は水獣へ向け電撃を放ったが、力が足らず水獣の勢いは止まらない。俺は突進をかわし、

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＢＵ・ＢＵ・ＢＵ・ＢＬＡＤＥ』
「ウェーイ！！」

ブレイド必殺のライトニングブラストを放った。命中した飛び蹴りにより水獣の動きは鈍った。

「なのは！今だ！！」それからはなのはが無事にジュエルシードを封印した。俺は今なのは達がプールから出てくるのを待っていた。
ああ、やっと出てきた。

「あれ？なんであんたがここにいるのよ？」
「…悪かったな。たまたまだ」
「まぁまぁ。アリサちゃんも門矢くんも落ち着いて、ね」
「そうだ。これからみんなでカラオケに行こうってことになったんだけど士くんも一緒に行く？」
「……わかった。行こう」
「ホントに！？」
「あぁ」

カラオケへの道中にて、

（なのは）
（ふぇっ？）
（この前は悪かったな。ごめん）
（えっ！？何のこと？）
（…いや、何でもない。気にするな）
（そう言われるとすごい気になるんですけど…）

そして

（なのは、これからもお前を守る）
（ふぇっっ！！？）

それからのなのははずっと顔が赤く、みんなに心配されていた。

街は危険がいっぱいなの？（前書き）

士のキャラが変わっていってる気がする。

まぁ、いいか。（↑少しは反省しろ）

街は危険がいっぱいなの？

プールで一騒動が会った日の夜、またもジュエルシードが発動し現在は封印の最中だ。

「リリカル…マジカル…ジュエルシードシリアル？？封印！！」

なのははその日2回目の封印作業を無事に終わらした。

「はぁ…、はぁ…」

「なのは、お疲れ様」

その帰り道…、

「なのは、お前大丈夫か？」

「大丈夫なんだけど…ちょっと疲れちゃった…」

なのはは見るからに疲れきっていて、直ぐにでも倒れてしまいそうだ。あ、転んだ。

「なのは、ねぇ大丈夫！なのは！！」

ユーノも心配そうにしている。しょうがないな…。

「よっこらせ！！」
「えっ！？えっ！？ふぇっっ！！？」

俺はなのはをおぶった。なのははかなり驚いている。正直、俺も少し恥ずかしい。

「家まで送って行ってやる。家はどっちだ？」
「でも、士くんも疲れてるのに悪いよ…」
「気にするな。また転んで怪我でもされる方が迷惑だ」
「……じゃあ、お願いします」

そして俺はそのままなのはの家へ向かった。

「重い…」
「ちょっと！！」次の日、なのはの父親がコーチをしている翠屋ＪＦＣの試合を見学することになっていた。面白い写真が撮れそうだ…。面白いのは元々だって！？ほっとっけ！！

そして試合が始まり、俺は写真を撮り始めた。

（これってこっちの世界のスポーツなんだよね？）
（うん、そうだよ。サッカーって言うの）

と、ユーノがサッカーのことについて聞いてきた。

（ユーノ君の世界にはこうゆうスポーツとかあるの？）
（あるよ。僕は研究と発掘ばかりであんまりやってなかったけど……）
（にゃはは…。私と一緒だ。スポーツはちょっと苦手…。士くんは？）
（俺に苦手なものはない。…カメラ以外は）

にしてもあのキーパーいい動きするな…。そのまま試合は終了し翠屋ＪＦＣは勝利した。それから翠屋によることになった。今俺はとても幸せそうな顔をしているのだろう。ここのデザートメチャクチャうまいのだ。目の前ではユーノがアリサ達にいじられているが俺は今忙しい。助けることはできない。許せ。

「さて、じゃあ私たちも解散？」
「うん、そうだね」
「そっか、今日はみんな午後から用があるんだよね」

そんな会話をしているところになのはの父、高町士郎がやってきた。

「お、みんなも解散か？」
「あ、お父さん！」
「今日はお誘い頂きましてありがとうございました」
「試合格好良かったです」
「あぁ、すずかちゃんもアリサちゃんもなありがとな！応援してくれて…。あと、門矢士くんだったかな？写真出来上がったら俺にも見せてくれよな！」
「ダメだよ…、お父さん。だって士くんの写真変なのばっかりなんだもん！」
「そうなのか！？」
「……なのはがひでぇ」

それから笑いが起きるがはっきり言われると正直へこむ。
それからアリサとすずかは帰って行ったが、俺はどうするかな…？

「ねぇ、士くん家に寄ってかない？」
「はっ！？」
「デザートもあるよ」
「……行く」

それからなのはの家へ到着し話を始めたが、やっぱりなのはには疲れが残っている様に見える。

「なのは、お前まだ疲れが残ってるだろ？」
「えっ！？」
「休めるときに休んどかないといざって時に保たないぞ」

なのはは黙ってしまったがその時、

「なのは！！」
「ユーノくんも気づいた！？」

えっ？何！？

『ジュエルシードの反応が現れました』

えっ！？気づかなかったのって俺だけ？

『マスターはそのあたりのことは勉強した方がいいかもしれないですね』

うるさい。
それから俺たちはジュエルシードが発動した場所に向かった。現場に到着した俺たちは、

「レイジングハートお願い！」
『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．ｓｅｔ　ｕｐ』
「変身！」
『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

変身完了した俺たちはそこから見える光景に驚いた。街の所々に巨大な木が生えてきており木々によって侵略された様になっていた。

「ひどい…」
「多分、人間が発動させちゃったんだ。強い想いを持ったものが願いを込めて発動させた時、ジュエルシードは一番強い力を発揮するから」

それを聞いたなのははいきなり落ち込み始めた。

「あのね…。私、気づいていたんだ。今日の試合でキーパーをやっていた子、その子がジュエルシードを持っているって！」

あぁ、あいつか…。

「私、気のせいだって思っちゃって…。こんなことになる前に止めなきゃいけなかったのに…」
「なのは…」
「なのは、おまえが今することは後悔じゃないだろ。お前には出来

ることがあるだろ？」

そうしたらレイジングハートが輝き始めた。

「ユーノくん！こうゆう時はどうしたらいいの？」

それからなのはは元になる部分を探し出し遠距離からの封印を完了した。あれ、今回俺何もしてなくない？夕方、帰り道にて

「いろんな人に迷惑かけちゃったね…」

なのははまだ落ち込んでいた。気持ちはわかるが…。

「お前はよくやっているよ。人間なんだから何でも完璧にいく訳ないだろ？たとえ失敗をしてもそれを活かして次に繋げることが大事だと思うぞ、俺は！」

そしたらなのはは、

「私、これからも頑張ってジュエルシードを集めるよ。自分なりの精一杯じゃなくて本当に全力の全開で！もうこんなことにならないように…」

「そうか…。まぁ無理すんなよ。俺が大変になるからな」
「もぅ…」

少しは元気になったみたいだなと思いながらなのはを家まで送っていった。

街は危険がいっぱいなの？（後書き）

次はやっと彼女を出せますね。

もうひとりの魔法少女（前書き）

今回グロンギ語を使ってみました。
訳はつけてありますが分かりにくかったらごめんさない
＞（｜　｜）＜

もうひとりの魔法少女

今日はすずかの家でお茶会を行うことになっている。最近はなのはだけでなくすずかやアリサともよく話をするようになっており今回は俺も一緒に誘われたというわけだ。

バス停で待ち合わせをした俺はなのはを待っていた。確か今日はなのはの兄貴も来るんだったな…。あ、来た。

「士くん、おはよー」
「あぁ」
「えーと、君が…」
「お兄ちゃん、昨日も言ったでしょ。門矢士くんだよ」
「…どうも門矢士です」
「あぁ、変な写真ばかり撮る彼か…」

なのは…、家の人に俺のことを話すのはいいが、その話はお願いだからやめてくれ。
それから俺たちはバスに乗ってすずかの家へ向かった。その間なのはの兄、高町恭也はずっと俺のことを見ていた気がする。
俺、なんかしたっけ？すずかの家に到着した俺たちはメイドの人、ノエルからすずか達の所に案内された。

案内された先ではすずかとアリサ、すずかの専属メイドのファリン、すずかの姉の忍がいる。
挨拶をすませそれからノエルとファリンはお茶の用意へ行き、恭也と忍は別の部屋へ移っていった。

「そういえば、今日は誘ってくれてありがとね」
「ううん、こっちこそ来てくれてありがとう」
「……今日は元気そうね…」
「！」
「なのはちゃん、最近元気なかったから…」

まぁ誰でもわかるよな。とか、思いながら俺は猫達を撮り始めた。

「もし、何か心配事があるなら話してくれないかなって。二人で話してたんだけど…」
「すずかちゃん…アリサちゃん…」

本当にいい奴らだな…とか考えていると、

「キュー！！！」

は？
声のする方を見るとユーノが子猫の一匹に追いかけられていた。

タイミングの悪いことにお茶の用意が出来て戻ってきたファリンの周りを回り始めた。
危ねぇな…とか考えていると案の定転びそうになっていた。

「「「危ない！！！」」」

みんなで助けようとするが、

「アヂー！！！」

転んだ際に吹き飛んだ食器などはキャッチした俺だったがお茶を頭から被ってしまった。

「ごめんなさーい！」

これなんてお約束？場所を移してここは外。俺にもわかるぐらいすぐ近くでジュエルシードの反応を検知した。

（どうしよう…）
（ほっとくわけにはいかないだろ）
（でもすずかちゃんやアリサちゃんになんて言えば…）
（とりあえず俺が様子を見てくるから後でなのはも抜け出してこい）

別の場所の写真を撮りたいと言い抜け出した俺はジュエルシードの反応がある場所へ向かった。
向かった先ではバカでかい猫が目の前に現れた。どうやら発動してしまったらしい。

「いくら何でもデカすぎるだろ…。さて、どうするか…」

とかボヤいていると後ろから声が聞こえてきた。

「ポセグジュエルシードンヂバサバ…（これがジュエルシードの力か…）」
「グロンギか…。ボボゼバビゾギデス？（ここで何をしている？）」
「ジュエルシードゾギダザビビビダ！（ジュエルシードを頂きにきた！）」
「悪いがそうはいかねぇよ。変身！！」
『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』
「ボボビバデスロボバ、メ・ガリマ・バ！（このメ・ガリマ・バに勝てるものか！）」

変身した俺はなるべくコイツを遠ざけようと別の場所に移動し始めた。

（なのは、聞こえるか？）
（どうしたの？）
（この前の怪人の仲間が出てきた。なるべく遠くへ誘い出すからジ

ユエルシードは任せていいか？）
（わかった。任せて！）

この時、自分が選択ミスをしていることに俺は気づいていなかった。
メ・ガリマ・バを誘い出すことに成功した俺はヤツの剣に苦戦していた。

「このやろう！」
「ゴラゲンヂバサパボボデギドバ？（お前の力はこの程度か？）」

そんな時ユーノからの通信が入ってきた。

（土！）
（なんだ！今忙しいぞ）
（なのはが…なのはが…）
（おい！なのはがどうした！？）
（新しい魔法使いからの攻撃を受けて怪我をしちゃったんだ！）
（っ！）

その間も俺はメ・ガリマ・バの剣を捌いている。

「てめぇはどけっー！！！」
『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ』

俺はディメンションスラッシュを発動させ一気にメ・ガリマ・バを切り裂き倒した。

「急ぐぞ！」

『はい！』

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＦＡＩＺ』

『ＦＯＲＭＲＩＤＥ　ＦＡＩＺ　ＡＸＥＬ』

ディケイドファイズに変身した俺は更にアクセルフォームにフォームチェンジをした。

なのは達が見えた時には同い年ぐらいの金髪の女がジュエルシードを封印している最中だった。

『３…２…１…ＴＩＭＥＯＵＴ』

時間切れになってしまい元の姿に戻ってしまったが何とか間に合った。

そして突然現れた俺に女は少し驚いているようだ。

「誰？さっきの子の仲間？」
「…そんなとこだ。おまえこそ誰だ？」

なるべく落ち着いている様に見せるが内心はとても焦っている。
向こうではなのはが倒れているからだ。

「邪魔をしないで…」
「悪いがそうもいかない」

そうしたら金髪の女はこちらに切りかかってきた。俺はその早さに驚いてしまった。
俺はギリギリで防いでいくがこのままでは俺も危ない。

『ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＩＬＬＵＳＩＯＮ』

俺は新たなカードを発動させ分身しての同時攻撃を仕掛け、動きを止めることに成功した。

「あなた…本当に何者？」
「通りすがりの魔法使いだ！覚えておけ…」
「…そう…。とにかくジュエルシードは頂いていきます」

女の手にはジュエルシードがあった。
どうやらさっきの戦闘中に奪われてしまったようだ。そのまま女は

去っていってしまい、俺はなのはを放っておくわけにもいかずなのはを抱きかかえその場を離れた。

すずかの家へ戻った俺は恭也からめちゃくちゃ怒られた。
なのはが目を覚ました時止めようとしてくれたが、なのはを守りきれなかったことに変わりはなく俺はとても気まずかった。

もうひとりの魔法少女（後書き）

なのは劇場版のＤＶＤ早くでないかな～。
まだ見てないのですが色々すごいらしいですね。

笑顔のために（前書き）

今回はオリジナル話です。
１人ライダーも出します。

笑顔のために

俺達と金髪の魔法使いが出会って数日後、俺はなのはを守れず怪我させたことを気にしてなのはとうまく話せないでいた。

「士くん、私何か気に触ることとした？」
「どうして？」
「だって…最近、私の事避けてるでしょ？」
「……そんなことねぇよ」

うまく喋れない俺はそんなことしか言えずその場から離れた。

俺はなのはを守ると決めてジュエルシード探しを手伝い始めた。しかし現実にはなのはを怪我させてしまい守れなかった。一度決めたことを貫けなかったことに俺は自分が情けなかった。そんなことを考えながら帰っていると目の前に幼稚園児ぐらいの子が泣いていた。どうやら迷子らしい。周りの人達はそれを見ない振りをして通り過ぎていた。

「…しょうがねぇな。おい！いったいどうした？」

とりあえず声をかけてみるも更に泣き出してしまい俺も困ってしま

った。そんな時、いきなり現れた男がジャグリングを始めた。それを見て子供は泣き止む。

「おお！」

それを見て素直に感嘆の声を出す。そして、ずっと探していたであろう両親も見つかりさっきの迷子は帰っていった。

「あの…ありがとうございます」
「ううん。でも君も偉いね。感心したよ。」

そして笑顔がとても印象的な人はバイクに乗り去っていった。その日の夜、またもジュエルシードを狙って怪人が現れた。

「今度はオルフェノクか…。いい加減しつこいな」

変身した俺はオックスオルフェノクとの戦闘を開始した。しばらく戦っているとオーロラのカーテンが現れ中からミラーワールドのモンスター、ディスパイダーが現れた。

「いいぜ！やってやる！！」

俺がそう言い斬り込もうとした時、一台のバイクが割り込んできた。

「あんた…」

それはさっきの人だった。

「君は…。」

その間にも襲いかかってくる怪人達。

「変身！」

さっきの人はお腹からベルトを出し、仮面ライダークウガに変身した。

「クウガか…。おい！そっちの牛を任してもいいか？」

「わかった！」

そして俺達は共同戦線を行うことになった。俺はライドブッカーの剣でディスパイダーの爪を捌きながら懐に飛び込んだ。

「はぁー！！」

懐に飛び込んだ俺はライドブッカーでヤツを斬り裂いた。そして…

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ』

ディメンションキックを発動させディスパイダーを倒した。
オルフェノクの方へ向かうと紫のクウガの剣がオックスオルフェノクを貫いていた。

「俺達は陽動にすぎない…。今頃別の怪人達がジュエルシードを…」

その捨て台詞のあとオックスオルフェノクは灰になった。
だからジュエルシードを持っていない俺も狙ってきたのか…。
そこで俺はなのはが危ないことに気づいた。

「頼む！協力してくれ！」
「えっ！？」
「大事なやつが危ないかもしれないんだ！」

「……わかった。協力しよう」

それから二人でなのはを探し始めた。なのははたくさんの怪人達に襲われていたが魔法砲撃によりまだ耐えていた。

「ディバインバスター！！」

空からディバインバスターを放ち数体の怪人は倒していた。

「なのはー！！」
「士くん！きゃあ！？」

なのはを発見し到着した俺たちだが目の前でなのはは落とされてしまった。
なんとか落ちてくるなのはを抱きとめた俺は…

「バカ！！どうして直ぐに俺を呼ばなかった！？」
「だって…」
「僕は士を呼んだ方がいいって言ったんだけど…。なのはが士に迷惑がかかるから呼ばないでって！」

何だよ、それ…。なのはは俺のことを考えてくれてるのに…。俺はどうだ…。自分が気まずいとか情けないとか自分のことしか考えて

いなかったじゃないか…。
そんなことを考えていると先に戦っていたクウガが吹き飛ばされてきて変身解除してしまった。更に追い討ちの光線により俺の変身も解除してしまった。

「さて、そろそろジュエルシードを「渡さねぇよ！なのはもジュエルシードも全部俺が守ってやる！」
「そうだ！俺はみんなの笑顔を守るためにクウガになったんだ。この子の笑顔も守ってみせる！！」
「そうだな…。いくぞ！！」
「「変身！！」」
『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

変身した俺の手元にカードが一枚ライドブッカーから現れた。

「一気にいくぞ！」
『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭＲＩＤＥ　ＫＵ・ＫＵ・ＫＵ・ＫＵＵＧＡ』
「ちょっとくすぐったいぞ！」
「えっ！？」

俺は仮面ライダークウガを巨大なクワガタメカ・クウガゴウラムに変身させ背中に飛び乗った。

「これが俺たちの力だ！」クウガゴウラムとの共同戦法で殆どの怪人を倒した俺たちは最後の一体、一ツ目タイタンと対峙した。

「おのれ…。あの方復活の為にはジュエルシードはどうしても必要なのだ！」

「あの方？おい！いったい誰のことだ？」

一ツ目タイタンはそれには答えず火の玉となり襲いかかってきた。

「しょうがねぇ…」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＫＵ・ＫＵ・ＫＵ・ＫＵＵＧＡ』

再びクウガゴウラムに変身したクウガは巨大なアゴで火の玉ごと挟み込んだ。そのまま降下してきたところへキックを決め一ツ目タイタンを倒した。

その後、なのはもユーノの魔法で無事回復した。

「色々、助かった。ありがとう。え～っと…」

「ああ、そっか！」

そういえば俺たちは互いの名前を知らずに一緒に戦っていたんだな…。

そうしたら名刺を渡された。

「２０００の技を持つ男、五代雄介…。俺は門矢士だ」

「高町なのはです。今日は本当にありがとうございます」

「士くんとなのはちゃんか…。じゃあ縁があったらまた会おうね」

「ああ…」

「それまで大事な人の笑顔をしっかり守ってみせるんだよ」

「おい！余計なことを言うな！！」

「ねぇ、何の話？」

それから雄介はバイクにに乗って去っていき、目の前に現れたオーロラの中に消えていった。

笑顔のために（後書き）

他のライダーで同じ様な話をするかはわかりませんが電王とダブルはやりたいな…とは考えています。

海鳴温泉（前書き）

気づいたらアクセス数が１００００を軽く越えていました。
驚きましたがいつもありがとうございます。

海鳴温泉

今日から日本国内は全国的に連休というわけで俺は翠屋の人たちに誘われて海鳴温泉に来ていた。
最近はジュエルシードも見つからないし、あの魔法使いのことなどもあったのでなのはには「今日ぐらいみんなで楽しめ！」とは言っておいたが…。

俺は今、温泉につかっている。ユーノに助けを求められていたが面倒なので流した。
そんな中なのはの兄、高町恭也が入ってきた。
この前ものすごく怒られたので2人っきりはさすがにつらい。
すると…

「そんなに緊張しなくてもいい」
「はぁ」
「この前は言いすぎたよ。ごめんな」
「いや、こちらこそ。すいませんでした…」

そんな会話をしていると

「なのはが今なにをしているかは知らないけど、君には随分と助けてもらっているみたいだね」

ヤバい。照れるな。

「あいつは自分の悩みとかは溜め込んで俺たちにはあまり言ってこない。もし、なのはが何かを悩んでたり困ったりしていたら君が力になってあげて支えてほしい…」

「恭也さん…」

「ただし、もし泣かせたりしたら……お前を殺す…」

……。

その声で言うな。

さっきまで感動してたのが台無しだ。温泉から出てきた俺はそこで変な女に絡まれているなのは達を見つけた。

「おい、どうした？」

「士！この女の人がさっきからなのはに絡んでくるのよ！」

アリサからそう聞いた俺は…

「昼間っから酒はよくないぞ。おばさん」

「おば…」

相手はかなり怒った顔をしている。まぁそうなる様に言ったんだが

…。

（いい度胸してるじゃないか！）

（（！！））

（とりあえず今のところは挨拶だけね。忠告しとくよ。子供はいい子にしてお家で遊んでなさいね。おいたがすぎるとガブッといくわよ）

（子供あつかいすんな！お・ば・さ・ん）

また怒ったらしい女はそのまま温泉の方へ向かっていった。

（士くん…）

（あぁ…）

そんなやりとりの後ろでは怒り狂っているアリサをすずかがなだめていた。その日の夜、俺はなのは達とは別の部屋で眠りにつこうとしていた。

（士くん、起きてる？）

（あぁ、どうした？）

なのはが念話で話掛けてきた。

（昼間の人、この間の子の関係者だよね？）
（多分な…）
（またこの間みたいなことになっちゃうのかな？）
（どうかな…。なのははどうしたいんだ？）
（私？私は……あの子ともう一度ちゃんとお話をしてみたい！）
（そうか…）

（……ねぇ、僕ねあれから考えたんだけど……やっぱりここからは僕が（ストップ！そこから先言ったら…怒るよ）
（そうだぞ！どうせ…ここからは僕一人でやるよ。なのはたちを巻き込めないから…とか言う気だったんだろ？）
（……うん）

図星かよ。

（ジュエルシード集め…最初はユーノくんのお手伝いだったけど、今はもう違う。私が自分でやりたいと思ってやってることだから！）
（そーゆうことだ。…二人とも今夜はもう寝とけ。また何かあるかもしんないからな…）
（うん…）

そうしたらやっぱりジュエルシードがあったらしく俺たちはその場所へ向かった。向かった先ではこの前の魔法使いたちがジュエルシードを封印し終わっていた。

「あ～ら、あらあら。子供はいい子でって、言わなかったけか？」

「子供あつかいすんな！って言わなかったっけ？」

とか反論しているとユーノが

「それをジュエルシードをどうするつもりだ！？それは危険なものなんだ！」

そうしたら答える理由がないとばかり女は犬の姿になった。
ユーノが言うにはこの女はあの魔法使いの魔力で生きる使い魔ってやつらしい…。
そして犬の使い魔は襲いかかってきた。
俺はその攻撃を抑えると…

「なのは！あとであいつの名前を教えてくれよな。ユーノ頼む！」

ユーノに頼み俺たちは別の場所へ魔法で転送されていった。別の場所へ転送してきた俺とユーノ、犬は…

「さて、ジュエルシードの何を知っている？目的はなんだ？」
「ごちゃごちゃうるさい！！」

何も答えないが犬の姿のあいつはその間も素早く攻撃してくる。
確かに速いが何とかならないこともない。

「そっちが犬女ならこっちは狼男だ。変身！！」
『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＫＩＶＡ』
『ＦＯＲＭＲＩＤＥ　ＫＩＶＡ　ＧＡＲＵＬＵ』

ディケイドキバに変身した俺は更に青いキバの姿、ガルルフォームにチェンジした。

「さっきから黙って聞いていれば私は狼だ！！」

えっ！？そうなの？
とにかくガルルセイバーを片手に犬（↑認識改める気なし）に向かっていった。

向こうの空では二人が魔法を撃ち合っている。
それはなのはが撃ち勝ったが相手は高速移動をし魔法の刃をなのはに突きつけていた。
そしたらレイジングハートがジュエルシードを一つ出した。

「さっすが私のご主人様！じゃあね」

そう言って人の姿になった使い魔は主のもとへ向かい去っていった。

俺とユーノもなのはのもとへ向かった。

「……なのは？」
「あの子ね、フェイトちゃんっていうんだって…」
「…そうか」

こんな時に俺はなのはになんて声をかけていいのかわからなかった。

伝えたいこと（前書き）

うーん、無印編はあまり変更するとなく進めていこうと思っているのですが難しいですね。
そのままでも面白味がないですし…。
一応オリジナルイベントも少しは考えています。

伝えたいこと

連休明け、今は学校で授業中だが俺は特技・バレないように寝るを使っていた。

「いい加減にしなさいよ！！」

何だ！？
おかげでデコをぶつけちまったじゃねぇか…

おでこをさすりながら声がした方を見るとアリサがなのはに対して怒っていた。

「この間から何を話しても上の空でボーっとして！」
「あ…ごめんね。アリサちゃん…」
「ごめんじゃない！私たちと話をするのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボーっとしてなさいよ！！」

それからアリサは怒ってどこかへ行ってしまった。

えっ！？なに！？どうなってんの！？

とりあえず、なのはのところに行き話を聞いてみることにした。

「いったいどうした？珍しいじゃんか、おまえ等が喧嘩するなんて」
「そんなこともないんだけど…。でも今のは私が悪いから…」

そう言ってまたなのはは考え込み始めた。

「なのは」
「何？」
「お前……将来はげるぞ！」
「ふぇっ！？」
「一人で悩みすぎだ。まだ８歳でそんだけ悩んでると大人になるころにはもう髪の毛ないな」

そう言って俺はなのはに向かって拝む。

「そ、そんなことないもん！士くんのイジワル！！」
「お～恐っ！……少しは元気でたみたいだな」
「あ…」
「何でも一人で抱え込もうとすんな。大方、悩んでるのはフェイトのことだろうが今はユーノもいるし俺もいる。それにあんな顔してたら心配してくださいって言ってるようなもんだぜ！」
「うん…ありがとう。なんか士くんお兄ちゃんみたいだね」
「寄せよ！」

そう言って俺は自分の席に戻った。

まぁアリサの方はすずかが何とかするだろ…。
とりあえず当面の問題を片づけないとな。
とか考えながら俺はまた寝始めた。その日の夜、

「アイス食べたいから買って来い！！って…まったく」

とかぼやきつつ夜の街に買いに来る俺も俺だが…。
ん…なんだ？

どうやらジュエルシードがまた街中で発動したようだ。

「しょうがない。アイスは少し待ってもらうか…。変身！！」
『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

変身した俺はジュエルシードが発動した場所へ向かいそれを封印しようとしているフェイトを発見した。

（士くん！ジュエルシードが発動したみたいなんだけど今どこ？）
（すぐ近くだ。近くにはあいつもいるぞ）
（あいつって…フェイトちゃん？）
（あぁ。あいつは今からジュエルシードの封印を始めるみたいだ。そこから先に封印できるか？）
（…うん。わかった）

それから二人の封印の光がジュエルシードに注がれ封印は完了され

た。

さて…問題はこれからだな。どうするか…。

そしてフェイトと対峙したなのはは…

「この間は自己紹介できなかったけど…私、なのは。高町なのは！私立聖祥大付属小学校３年生」

自己紹介したなのはに対しフェイトは魔法の鎌で斬りかかってきた。俺はそれをソードモードにしたライドブッカーで防いだ。

「…ったく。俺は門矢士だ。同じく私立聖祥大付属小学校３年。趣味はカメラだ」

明らかに動揺しているフェイトの鎌をはじき俺たちは距離をとった。

「なのは、やれるのか？」

「今は…戦うよ。本当は嫌だけど、フェイトちゃんとちゃんとお話をする為にも…今は！」

「…わかった。そしたらあっちの犬っころの相手は俺がしてやる。しっかりあいつとお話してこい！」

「うん！」

そのままなのははフェイトへ向かっていき、俺は犬と対峙した。戦闘を開始した俺たちは…

「おい！犬っころ。お前の名前は？」
「私は犬じゃない！！狼だ！！！」
「わかったわかった。…で名前は？」
「……アルフだ」
「アルフか…。おい、なんであいつはあんなに苦しそうなんだ？」
「！！お前に…お前にフェイトの何がわかる！！？」
「わかんねぇから聞いてんだろ？」

一方、なのはとフェイトはジュエルシード争奪の末、両方のデバイスが壊れてしまいジュエルシードからとてつもない魔力が解き放たれた。
更に暴走し始めたジュエルシード。
フェイトはそれをもう一度封印しようとしていた。
デバイスがないため傷ついていくフェイトを見てられなくなった俺は…

「まったく、しょうがないやつだなぁ…」
「あなた、どうして…」
「目の前で傷ついているやつがいるのにほっとくわけにもいかねぇだろ…」

フェイトと変わり俺はジュエルシードを両手で包み込んだ。

結構な力じゃねぇか…。

「てめぇはおとなしくしていろ！！」

そう叫び、ジュエルシードを無理矢理止めることには成功したが俺の体はボロボロになってしまいそのまま気絶してしまった。

時空管理局

次の日、体の怪我もユーノの魔法もあり回復した俺は学校に来ていた。

「士くん、もう体は大丈夫なの？」
「あぁ、俺の体は割と頑丈だからな。レイジングハートは？」
「……うん。かなり破損は大きいけど今日中には回復するみたい」

そう言ってまた暗い顔をするなのは。

あぁ～聞かない方が良かったか？
まぁなのはに怪我がなくて良かったかな？

同日　ＰＭ６：２４
海鳴臨海公園にてジュエルシードが発動した。
変身した俺たちが到着した時には既にフェイトが戦闘をしていた。

『ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ』

その戦闘に介入した俺はライドブッカー・ガンモードの光弾を連続

発射した。しかし相手はバリアをはりその攻撃を防いだ。

「バリア持ちかよ…」

そしてお返しとばかりにヤツは根を広げ攻撃してきた。

「飛んで！レイジングハート。もっと高く！！」

そう言って回避したなのはは砲撃体勢に入った。

「アークセイバー！いくよ！バルディッシュ！！」『ＡＲＫ　ＳＡＶＥＲ』

フェイトはバルディッシュから光の刃を放ち、根を切断していき相手のバリアを破壊しようとしていた。

『ＳＨＯＯＴＩＮＧ　ＭＯＤＥ』

「いくよ！レイジングハート！！撃ち抜いて！ディバイン…」

『ＢＵＳＴＥＲ』

なのは空からディバインバスターを放ち…

「俺もやるか！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ』

俺はディメンションブラストを発射した。

そして…

「貫け！轟雷！」

『ＴＵＮＤＥＲ　ＳＭＡＳＨＥＲ』

最後にとどめとばかりにフェイトがサンダースマッシャーを発射し木の怪物を倒した。「ジュエルシード…シリアル？」

「封印！」

二人は現れたジュエルシードを封印しようとし、そして昨日と同じ状況になった。

「ジュエルシードには衝撃を与えてはいけないみたいだ」

「うん…。夕べみたいなことになったら私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュもかわいそうだもんね」

「だけど譲れないから…」

そうしてまたも対峙しあう二人。

「私はフェイトちゃんとお話したいだけなんだけど…。私が勝ったら…ただの甘ったれた子じゃないってわかってもらえたらお話聞いてくれる？」

そして戦闘開始しようとした時…

「ストップだ！！」

どこから出てきたのか知らないがいきなりひとりの男が現れた。

「ここでの戦闘行動は危険すぎる。時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ！詳しい事情を聞かせてもらおうか？」……。

なんだ？あのＫＹは…。

てか、俺が何のために空気になってたと思ってるんだ。

俺は若干イライラしながら事態を見守っていた。

「まずは二人とも武器をひくんだ！」

そう言って降りてくる三人。
そこへアルフがフェイトを助けようと上空から攻撃をしかけた。
あれ、俺って完璧に乗り遅れてない？
てゆうか、置いてけぼり…？
フェイトはアルフの支援を受けジュエルシードを奪おうとしたが、
クロノの魔法で阻止された。更に追撃しようとしているクロノを見
ていた俺はおもいっきり殴り飛ばした。

「何をする！？これは公務執行妨害だぞ！」
「俺は訳の分かんないＫＹから攻撃されそうになってる人を助けた
だけだ」
「何っ！？」

その隙にアルフはフェイトを連れて撤退していった。
その間も俺とクロノは睨みあっている。

「貴様…抵抗するのなら容赦はしないぞ」
「…どう容赦しないんだ？」

そしてクロノは魔力弾を発射してきた。
それを撃ち落としながら俺はライドブッカーにカードを差し込んだ。

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＡＧＩＴＯ』

ディケイドアギトに変身した俺はクロノへ向けて駆け出した。
それを見てクロノは魔力弾を連続発射した。
だが俺はあっというまにクロノとの距離を詰め、手刀でデバイスを叩き落としキックでクロノを吹き飛ばした。

「少しおしおきだ」
『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　Ａ・ＡＡ・ＡＧＩＴＯ』

俺はライダーキックを放ちクロノに追い討ちをかけた。

「どうする？まだやるか？」
「くっ！」

「そこまでにしてもらえないかしら？」

突然、空から声が響きその戦闘を止められた。

「クロノ、ちょっと話を聞きたいからそっちの子たちをアースラまで案内してくれるかしら？」
「しかし…母さん！」
「クロノ・ハラオウン執務官！」

「……了解です。直ぐに戻ります」

こうして俺たちはアースラってところまで案内されることになった。
アースラの中へ案内された俺となのは。
ところで時空管理局って何？

（え～と、簡単に言えばなのは達の世界以外にもいくつも世界があってそれらの干渉しあうような出来事を管理しているのが時空管理局なんだ）
（…士くん、わかった？）（…だいたいな）

そうして先を進んでいるとクロノが…

「何時までもその格好とゆうのは窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

それもそうだな。

そうして変身解除する俺たち。

「君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」
「あぁそういえばそうですね。ずっとこの姿のままだから忘れてました」

光につつまれたユーノ。そこからひとりの少年が現れた。

は？

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

「「……！」」

えっ！？誰！？

なのはと俺はすっかり固まってしまっていた。

「ふぇぇぇぇ！！！？」

驚きすぎてテンパっているなのは。

「えーと、最初に出会った時って僕はこの姿じゃ…」

「違う違う。最初からフェレットだったよ～」

「ちなみに俺も知らんぞ」

指を額にあて少し回想するユーノ。

「あっ～！！そうだったそうだった。ごめんごめん。なのは達には

この姿見せてなかった！」

ユーノ…。
お前あとでげんこつな。
そう思いながらこの艦の艦長の所まで案内されていった。

「艦長来てもらいました」

案内された部屋はやたら和風な部屋だった。

「お疲れさま。まぁ、みなさんどうぞどうぞ。楽にして」

何だ、このノリ…。茶菓子が出され、まずユーノが自分のことを話し始めた。

「なるほどそうですか…。あのロストロギア・ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」
「それで僕が回収しようと…」
「立派だわ」
「だけど…同時に無謀でもある！」

ロストロギアとは遺失世界の遺産。
ようは技術を持ちすぎた為に滅んでしまった世界。
その後に残された危険な技術の遺産ってとこだろう。
俺たちが関わっているジュエルシードも同様のもので最悪の場合いくつもの世界を滅ぼしてしまうものらしい。

「これよりロストロギア・ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」
「「えっ！？」」

その言葉を聞き動揺するなのはとユーノ。

「君たちは今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」
「でも、そんな…」
「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」
「でも…」

尚も食い下がるなのは。

「まぁ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて三人で話し合ってそれからお話をしましょ」
「送っていこう。元の場所でいいね？」
「はい…」

「ちょっと待った」

俺はその話が終わりそうになるのを止めた。

「さっきあんたたちは民間人に介入してもらうレベルの話じゃないって言った。なのにどうして時間をとる？」

「…！」

「協力してほしいならそう言えばいい。やり方が回りくどいんだよ」

そう指摘すると二人共驚いていた。

そしてなのはに問いかけた。

「なのは、お前はどうしたいんだ？」

「私は……私はジュエルシード集めを続けたい。それでフェイトちゃんともっとお話をしたい。」「…だそうだ」

それを聞いたリンディは…

「わかりました。三人に協力をお願いします」

「かあ…艦長！」

「お二人の力はあなたも見たはずよ。」

「う…」

「但し、三人の身柄を一時時空管理局の預かりとすること、お二人は保護者の方にお話してからになります。それでいいかしら？」

「わかりました」
「あぁ。最後に質問。他にジュエルシードを集めようとしている組織があるみたいなんだが何か知っているか？」
「いや…わからないが…」
「そうか…」

そう言って俺たちは別れ、元の場所に戻った。

時空管理局（後書き）

次回は天の道を往く人がでてきます。

天の道（前編）（前書き）

ごめんなさい。
遅くなってしまいました。

天の道（前編）

俺たちがアースラで話をした日の夜、俺は竜也にどう話そうか迷っていた。
さすがに魔法だの時空管理局だのは現実離れしすぎだ。

うーん…どうするか…。

そんな時に

「お前、何か俺に言いたいことがあるんじゃないのか？」

なんでわかるんだ？

「もう結構一緒に暮らしてんだ。なんか隠してることがあることぐらいはわかるさ。」

そして俺は魔法のことはぼかして全部話した。

「今、俺はあいつを助けたい。自分でもよくわからねぇけどそう思う。」
「そうか…。じゃあ頑張ってこいよ」
「いいのかよ！随分簡単にＯＫするんだな…」
「おまえが自分で決めたことだろ？だったら最後までやり抜けばい

いさ。そのかわり全部終わったらちゃんとその子を紹介しろよ！」
「ああ…」

※

そして俺たちはアースラに民間協力者として協力し現在はジュエルシード回収の真っ最中だ。
気合いも入ったし、矢でも鉄砲でもなんでもこいって気分だ。

『ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ』

俺はユーノの鎖に縛られている不死鳥型のモンスターに光弾を連続発射し弱らせる。

「「なのは今だ！」」
「うん！」
『ＳＥＡＬＩＮＧＭＯＤＥ　ＳＥＴＵＰ』
「リリカル…マジカル…ジュエルシードシリアル？封印！」
『ＳＥＡＬＩＮＧ』

なのはは封印を完了しジュエルシードはレイジングハートに吸い込まれた。

「なのはもジュエルシードの封印にはすっかり慣れたな」
「そんなことないよ。まだ緊張はしてるんだけど士くんやユーノくんが一緒だから出来るんだよ」
「謙遜すんな」

そう言って俺はなのはを突っつき笑いあう。

「さて…またお客さんだ」
「えっ！？」

周りにはたくさんのサナギ体のワームと成虫態コキリアワームがいた。
俺、なのは、ユーノはジュエルシードを渡したりしないために戦闘を開始した。

「ディバインシューター！」
『ＤＩＶＩＮＥ　ＳＨＯＯＴＥＲ』

なのははディバインシューターでサナギのワームをまとめて撃破し

ていく。
ユーノもワームを鎖で縛りなのはをフォローしている。
その頃俺はコキリアワームと戦闘していた。

「虫には虫だ」
『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＫＵＵＧＡ』

ディケイドクウガに変身し特に問題なく戦っていたがコキリアワームはクロックアップをし攻撃をしてきた。

「おわっ！？」

吹き飛ばされてしまい木に激突する俺。

「このやろう！」
『ＦＯＲＭＲＩＤＥ　ＫＵＵＧＡ　ＰＥＧＡＳＵＳ』

フォームチェンジしペガサスフォームになった俺はその超感覚でコキリアワームを探し当てた。「そこだ！」

ライドブッカーを変形させたペガサスボウガンで射抜きコキリアワームを倒した。
しかしまわりにはまだたくさんのワームが残っていた。

「数が多い！クロノたちは何してんだ」

その時今までまわりにいたワームが一瞬のうちに爆発した。

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

そしてその爆炎の中から赤いカブトムシ型の戦士―仮面ライダーカブトが現れた。ワームを一掃した俺たちはカブトの変身者をアースラまで連れて行くことになった。

「では、まずあなたのお名前から伺ってよろしいでしょうか？」

男は空に人差し指を立てこう言った。

「おばあちゃんは言っていた…。俺は天の道を往き、総てを司る男。天道…総司」

「……では天道さん。あなたはどうやってこの世界に来たのですか？」

「目の前にオーロラが現れそれを越えたらこの世界にいた。しかし問題はない。おばあちゃんはこうも言っていた。俺が望みさえすれば、運命は絶えず、俺に味方する。帰ろうと思えばいつでも帰れる。」

リンディ提督はこの男―天道総司の返答にすっかり困ってしまっていた。

（なんかすごい人だね）

（…どうだか）

なのはもとんでもないやつとは思っているらしい。

そして天道は自分の世界に帰るまでの間アースラにて保護することになった。

天の道（前編）（後書き）

長くなりそうだったので話を分けることにしました。

天の道（後編）（前書き）

またも遅くなってしまい申し訳ございません

天の道（後編）

俺はアイツ―天道総司が嫌いだ。
自分勝手で俺様で人を振り回して。
天道は食堂の料理が納得いかず自分で作り始めたり（手伝わされたが確かにうまかった）人を呼びつけて模擬戦じみた訓練を勝手に始めるはで（勝ったことはない）、俺は一番の被害者になっていた。
ホントに何なんだよ、アイツ。

＊＊

俺は今、アースラの廊下を歩きながらどうしたら天道を見返すかを考えていた。

「あれ？士？なんでこんなところにいるの？」
「ん？」

気づいたら目の前にはユーノがいた。

「いや、どうしたら天道に見返せるかを考えていたんだが…」
「いや…そうじゃなくて。なのはと一緒に遊園地に行ったんじゃなかったの？」

「は？何それ？」
「え…。だって士が最近なのはが頑張ってるからってリンディ提督に自分で進言してたじゃないか？」

……？
俺そんなことした覚えないぞ。てか最近は天道のことばかりでなのはとあまり話をしていない。
……！！
そういうことか！

「ユーノ！なのはが行った遊園地ってどこだ！？」俺は転送してもらい遊園地に来た。
早くなのはを探さないと…。
念話で話しかけても全然つながらないし。

「そこで止まってもらいましょうか？」

呼び止められ振り返るとそこには４人の男女がいた。

「あなたに彼女を見つけられるとあの人の作戦が台無しですからね」
「作戦？俺に擬態したワームでなのはを誘い出しジュエルシードを奪うっていう単純なやつだろ？」
「正解よ。でも賢すぎる坊やは嫌いよ」
「ねぇ、冴子さん。こいつもう殺しちゃっていいでしょ？」
「そうね。邪魔になるだけだしね」

「オレガタオス！」

そう言って４人の男女―メガネをかけた男はセンチピードオルフェノクに、色っぽいけど怖そうな女はロブスターオルフェノクに、あまり頭がよくなさそうなやつはドラゴンオルフェノクになり、最後に筋肉質な外人はクロコダイルオルフェノクに変化した。

「今は急いでるからあとにしてほしいもんだ。変身！！」

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

そして俺はなのはを助けるために４体のオルフェノク―ラッキー・クローバーに挑んでいった。

＊＊

最初はクロコダイルオルフェノクと一対一を行っていたが俺はその怪力におされてしまっていた。

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＨＩＢＩＫＩ』

その怪力に負けないために俺はスペックが最も高いディケイド響鬼

に変身した。
力では負けなくなったがそこへセンチピードオルフェノクが鞭の援護とロブスターオルフェノクがサーベルを使い割り込んできた。

『ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＯＮＧＥＫＩＢＯＵ　ＲＥＫＫＡ』
「はぁあぁぁぁ、はぁっ！」

そこで俺は音撃棒・烈火をだし鬼棒術・烈火弾でまとめて攻撃した。

そしてドラゴンオルフェノクが乱入してきてその巨大な爪で思いっきり俺をぶっ飛ばした。俺はその衝撃で元の姿に戻ってしまった。

「さすがに四対一はツラいか…」
「どうしたの？もう終わり？」
「うっせ！」

でもどうする？
このままだとなのはのところにも行けないぞ。
そこへカブトゼクターが飛んできてラッキー・クローバーを攻撃した。

「おばあちゃんが言っていた」

天道がそう言いながら遠くから歩いてくる。

「人が歩むのは人の道。その道を拓くのは……天の道」
「天道！なんでここにいる！？」
「言ったはずだ…。俺は天の道を往くだけだ」
「何なの、あなた？」
「俺は天の道を往き、総てを司る男……天道総司。変身！」
『ＨＥＮＳＩＮ』

天道のもとに来たカブトゼクターはベルトにセットされ天道を仮面ライダーカブト　マスクドフォームに変えた。

「門矢。お前も天の道を往け」

それを聞き俺は走り始めた。

＊＊

遊園地に突然怪人が現れたこともあってかほとんど人はいなかった。
でも、俺にはわかる。
なのははまだここにいる。

＊＊＊

ＳＩＤＥ・なのは

士くんが息抜きをしようって言って遊園地に来たんだけど、やっぱり様子が変。
今は鏡の迷宮にいるんだけどさっきから話しかけても何も言ってくれません。
でも、士くんと二人で遊園地…これってデートになるんだよね。
あぁ、なんかそんなこと考えてたら恥ずかしくなってきちゃった。

「どうした？なのは」
「ううん。何でもないよ。それより士くん。今日は誘ってくれてありがとう」
「……なのは。俺、お前に言いたいことがあるんだ」
「えっ！？」

ふえぇぇっ！！！？
何！？
私まだ心の準備とかできてないよ～。

「ジュエ…

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ』
「ふぇ？」

そんなデバイスの音声が響いたと思ったらもう一人の士くんが鏡を何枚も割りながら現れ、士くんを蹴り飛ばしてしまいました。
そのまま士くんは爆発してしまいました。

「俺に擬態するのは１０年早い！なのはは……大丈夫そうだな」
「ふぇっ！？う、うん。でも、何がどうなってるの？」
「気にするな。大したことじゃないさ」
「でも…」
「大丈夫だ。俺がずっとそばにいる。だからそんなに不安そうな顔するな」
「うん…」

なんかすごい恥ずかしいことを言われた気がします。

「まだやることがあるからちょっと行ってくるな。少し、待っててくれ」
「……気をつけてね」

そうして私は走っていく士くんを見送りました。

なのは・ＳＩＤＥＯＵＴ俺が天道のところに戻ると四対一ではやはり苦戦しており、傷つき倒れていた。

「よう、そっちの用事は終わったのか？」
「あんたのおかげで大体終わったよ。後はコイツ等だけだ」

そう言って俺は天道を助け起こす。

「なに？またやられに来たの？」
「どうかな？俺たちはたった一人の人を守るために戦っている。その俺たちがお前たちみたいなやつに負けるわけがない！」
「お前…なんで知っている？」
「俺はあんたが嫌いだからな。だから大体のことはわかるさ」
「そうか…」
「君、なんなの？」
「通りすがりの魔法使いだ。覚えておけ！変身！！」
『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

俺はディケイドライバーにカードを差し込みバックルを回転させ変身した。

「天道、まだやれるよな？」
「当然だ。変身！！」
『ＨＥＮＳＩＮ』

天道はベルトにカブトゼクターをセットし更に…

「キャストオフ！」
『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

カブトの装甲が弾けとび、

『ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ』

カブトの角が上がってきてライダーフォームになった。俺はクロコダイルオルフェノクとロブスターオルフェノクを、カブトはドラゴンオルフェノクとセンチピードオルフェノクを相手にしていた。

『ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＳＬＡＳＨ』

俺は切れ味をあげたライドブッカー・ソードモードで2体のオルフェノクを一気に斬り倒す。
カブトもクロックアップでセンチピードを吹き飛ばし、龍人態に変化したドラゴンオルフェノクと戦闘をしている。

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』
「北崎さん、ここは一度退きましょう！」

「いやだ！僕が負けるわけがない。負けるわけがないんだ！！」

しかしドラゴンオルフェノクもカブトによっておされていた。

「悪いがここで逃がすつもりはない」

俺は一枚のカードをバックルに差し込んだ。

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭＲＩＤＥ　ＫＡ・ＫＡ・ＫＡ・ＫＡＢＵＴＯ』

「ちょっとくすぐったいぞ」

「なに？」

俺はカブトの背を開き巨大なカブトムシ型のメカ・ゼクターカブトに変形させた。

「なんだ、あれは？」

「北崎くん！」

「僕は負けない！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ　ＫＡ・ＫＡ・ＫＡ・ＫＡＢＵＴＯ』

俺はディケイドメテオを発動させゼクターカブトはラッキー・クローバーに対して突進していった。

その突進によりドラゴンオルフェノク以外を吹き飛ばしドラゴンオルフェノクはゼクターカブトに捕まり上空から地面に叩きつけられた。

「う…あ…」
『1，2，3……』
「ライダー…キック！」
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』
「はぁあぁあっ！！！」
「はっ！！」

そして起き上がろうとしたドラゴンオルフェノクに対して俺たちは同時に必殺キックを決めた。

「驚いたな。まだ生きているのか」
「くそ、くそ！」
「北崎くん！」

メガネと女はヤツを助け起こし、そこへオーロラが現れて消えていった。俺たちは戦いを終えなのはを迎えにいき事情を説明した。

「そっか…。士くんが二人いたのはそうゆうことだったんだね」

なのはは少し落ち込んでいた。
まぁ、あんなことがあれば無理もないか…。

「全部終わったらまた遊園地に連れてきてやるよ」
「約束だからね！」

立ち直り、早っ！
それを見ていた天道は…

「……どうやらここでの俺の役目は終わったようだな」

後ろにはまたオーロラが現れていた。

「門矢。なのはを泣かせるなよ」
「当然だ。」

そうして去ろうする天道に俺は…

「天道！俺はあんたが嫌いだ。だから今度は見返してみせるからな！」

天道は不敵に笑うとそのままオーロラの中へ去っていった。

天の道（後編）（後書き）

門矢士と天道総司はやっぱり似ているところがあると思います。
似ているからこそ嫌い。
でも、お互いに認めている。

そんな関係になりそうだと思い書いてみたのですが難しかった。

そしてなんと唐突な展開の多いことか…。

泣けるで！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6327m/

魔法少女リリカルなのは＆ディケイド

2010年12月9日01時28分発行